

文法の定着をめざして



Kanatani Ken

東京学芸大学教授

金谷 憲

● コミュニケーションのために文法が必要

「文法ではない。コミュニケーションだ」というような発言が真顔でされる昨今です。もちろん、単語を並べるだけでもある程度意思の疎通が出来ます。しかし、それはかなり簡単なことを伝えるときに限られています。英語力を高め、したがって、英語によるコミュニケーション力を高めるためには、どうしても文法の定着が不可欠です。

まず、このことをお断りした上で、文法指導のポイントを挙げてみましょう。

● 文法指導の2つの柱

文法指導の大きな柱は次の2つです。

- ① 英語にたくさん触れて、たくさん使わせることによって定着を図る。
- ② 文法ルールを整理して示したり、練習問題などをさせたりして、定着の助けにする。

これらの柱はどちらも大切ですが、大切さの順番は、①②の順になります。あくまでも、①が本筋で②は①の補助だと考えて下さい。

文法指導という一番大事な①が忘れられて、②ばかりが議論される傾向にあります。これではダメです。あくまでも、英語指導全体で文法を生徒の頭の中に定着させることをめざすのが本筋です。

● 知っていること vs. 使えること

コミュニケーションには文法が必要だと言いましたが、誤解のないようにして頂きたいと思えます。ここで大切なのは、文法が定着していることであって、文法について知っていることではありません。

to不定詞の用法を問われればたちどころに答えられるのに、ちっとも使えない生徒がいます。これでは困ってしまいます。

「このitは何のitですか」などと聞いてくる生徒がいます。itにいろいろな種類があると言うより、いろいろな状況でitを使うのだと言った方が妥当でしょう。「天候のit」、「明暗のit」などと名前と呼べると安心する気持ちはわからないでもありません。しかし、困るのは、名前で呼んだら、それでわかったような気持ちになり、終わりになってしまふことなのです。

知っていることと使えることは別のことです。使えなくては話になりません。高校生用の文法参考書を出版されているある大学教授の英文の手紙を読む機会がありましたが、そこには彼の参考書にあるルールに違反している表現がたくさん見られました。こんなことでは、「文法ではない。コミュニケーションだ」という発言が正しいことになってしまいます。

● 使わせなければ定着しない

「指導」と言うと、自動的に「レクチャー」を思い出す教師が多いのも困ったものです。指導と言っても、その仕方にはいろいろな種類があります。

文法の定着で一番大切なのは production、つまり、書いたり話したりするという活動をさせることです。

文法規則の解説をしたり、特定の文法規則だけを使う練習をしたりするだけでは、不十分です。穴埋めや1文の和文英訳という活動だとそれなりに出来ても、まとまった英文を書く、英語で会話をするなどといった総合的な活動になると、文法が定着していなければ、それをうまく使えないか、間違いを犯すこととなります。

ただし、この間違いは、文法習得の上で非常に大切なことです。間違っう機会(?)を十分に与えてあげることが文法定着の上で大切なことです。

間違いを経験しなければ成長もしません。まとまったことを書かせたり、話させたりするのは、教師にとってはやっかいなことではありますが、これを避けていては、文法が定着することはあり得ません。

● 文法解説で大切なこと

①が大切なことを述べたところで、次に②の説明に移りましょう。

文法解説で必要なことは、解説の言葉遣いに注意することと、解説の必要性を考えることです。

● 文法用語は最小限に

解説の言葉遣いのことから始めてみましょう。

文法用語は必要最小限が原則です。文法用語を多用しても、文法の理解には役立たないことが多いことを肝に銘ずるべきです。

「動詞」や「名詞」という用語を使わないで文法解説を行うとなると、かなり時間がかかりそうです。しかし、なくても一向に構わない用語もたくさんあると思います。

例えば、相関接続詞。この用語を聞いて、すぐに実例が挙がる読者もいるでしょうが、まったくイメージの浮かばない人もいるでしょう。Not only ~ but also, so ~ that などという類の接続詞のことです。

試みに、私の大学で英語教育専門の大学院生10人ぐらいに聞いてみました。ちゃんと例が挙げられて説明できた人は、1人しかいませんでした。まったくどういう接続詞か見当がつかないという人の方が、多数でした。その中には英語の現職の先生で大学院に勉強に来ている人もいましたが、現職の先生はわかったかという、そうではありませんでした。

これなどは、まとめて相関接続詞として扱わなければならないということはないということを示していると思います。個別の表現として覚えれば、それで何も問題がありません。現に私はそうしてきました。

高校生用の文法参考書を見ると、難しい用語が並んでいます。相互代名詞、不定冠詞相当語、能動受動態、分割不定詞、保留目的語、受動不定詞…。どれだけおわかりになりますか。全部たちどころに答えられる方は、よほどの文法マニア(?)でしょう。

用語とその意味するところを知っているのは、英語の教師としてよいことですが、生徒を指導するときに不必要な専門用語でむやみに脅しても、文法の定着とは無関係です。

● 意外と解説されていないこと

解説の言葉遣いのことはこのくらいにして、次に文法解説すべきか、そうではないかの判断の問題に移りましょう。

高校の先生方では、「文法、文法」と言う人が多い割には、文法のどういった側面を、生徒に対して解説すべきなのかという、プライオリティーの意識があまり高くはないように思えます。

大変重要だと思われる事項の中で、高校であまり解説がされていないものをいくつか挙げてみましょう。

● 修飾方法

まず、修飾方法があります。学校現場では、「修飾方法」としてまとめて整理されることがあまりないように思います。

修飾の仕方の一つとして、英語には後からの修飾(後置修飾)があって、日本語とは異なることがハッキリと整理されていないと思います。私の大学の学生たちに時々聞くのですが、こうしたことをちゃんと高校で整理してくれた先生はあまり多くはなさそうです。

中学で、後置修飾のいろいろなタイプについて

ては習ってはいるので。後置修飾は中1から出ています。

A book on the desk
A girl from Canada

といったものがこれの代表選手です。

その後、中2、中3となると、something to eat のような to 不定詞のもの、people living in this country などという現在分詞を用いたもの、a novel written by Soseki Natsume などという過去分詞を使ったタイプなどと続き、極めつき(?)は3年で出てくる関係詞節を使ったものということになります。

このように、中学校で一通り後置修飾は出てくるのです。中学校でこうした後置修飾を整理してくれる先生もいます。しかし、なんと言ってもすべてのタイプが出揃った時点、すなわち高校で後置修飾を整理した方が、生徒の頭の整理には役立ちます。また、必要でもあります。なぜなら、この修飾の仕方が生徒の読解などで大きな障害になっていることが知られているからです。

特に関係代名詞の導入を中学で「2文結合」という形で解説されている生徒にとっては、関係代名詞が節による後置修飾のためのものであるという理解が出来ていないことが多々あります。

- 1) Nancy gave John a book.
- 2) Her uncle wrote a book.
- 3) Nancy gave John a book that her uncle wrote.

1)と2)をいっしょにすると、3)のようになるのだ、というのが2文結合による関係代名詞の導入です。

このように習うと、生徒は、関係代名詞というのは2つの文を繋ぐときに用いられる何やら不思議なものと誤解してしまいます。節による

後置修飾の例であることを説明してあげる必要があるのです。

このように後置修飾などたくさん出てくるのですが、何となく説明されずに高校に入学する生徒もかなりいます。是非、修飾の仕方を日本語との対比でまとめてあげて頂きたいと思います。

● 主語 vs. 主題

意外と解説されていないことのもう一つに、主語と主題の違いがあります。言語には、主題が大切にされる傾向にあるものと、主語に焦点をあてる傾向にあるものがあります。もちろん、程度の問題ではあります。

英語と日本語を比べてみると、英語はどちらかと言えば、主語が大切、日本語は主題を特別扱いする傾向があります。

生徒たちに英作文させると、よく次のような種類の英語が出てくると思います。

Yesterday was interesting. (*非文)
(昨日は面白かった。)

Today my sister is school. (*非文)
(今日、お姉ちゃんは学校だ。)

多分、言いたかったことは()の中に書かれた日本語のようなことだったのでしょ。

どうしてこういった英作文をしてしまうのかと言うと、おそらく、主語と主題の違いが生徒たちの頭に入っていないからだと思えます。

中学3年生に、好きな季節のことを聞いたときです。ある生徒はautumnだと答えました。「どうして」と聞くと、Autumn is ... と言い始めて詰まってしまいました。多分、彼の頭の中には「秋は…」という日本語が浮かんでいたのだと思います。Autumn is ではその先を続けるには大変複雑な構文を使わなければならなくなってしまいます。私はこの生徒に、「In autumn で始めてごらん」と言いました。すると、彼はいろいろなことを言ってくれました。

主語と主題の違いを解説してあげれば、もう少しましな作文ができたことでしょう。

大学の英語専攻の学生に、主語と主題の違いについて、高校時代に解説を受けたかどうかを聞いてみましたが、解説を受けたと答えた学生は皆無でした。

最初にも述べたとおり、高校で文法を重視する先生方はたくさんいらっしゃるようですが、実際に英語を使う段階になって大切になる文法事項の整理はあまりなされていないように思います。

このように、コミュニケーションの上で非常に重要だと思われる事項（あるいは切り口）が説明されていないということが他にも多々あると思います。もう一度、教えるべきことを整理精選して、高校生の頭の整理を促す必要があります。

● 中学文法の整理

解説する事項の優先順位をつけるにあたっては、中学文法の整理から始めるとよいと思います。

仮定法過去、過去完了、強調構文等々といった高校初出の文法事項に行く前に、まず、中学で習った文法ルールの定着を助けるような指導を手がけるべきです。

教えている生徒たちが中学文法をすべて定着させていて、中学文法卒業の状態なら先へ行くことも良いでしょう。しかし、そうした状態にある高校は極少数です。中学は卒業しても中学文法をマスターしている生徒はそんなに多くありません。

● 大学入試だから文法？

最後にもう一つ、高校での文法指導の留意点として、入試がらみのことを述べておきたいと思います。

高校の先生方は二言目には「大学入試があるから…」と言います。文法についても同様でしょう。あるいは文法が、その典型的な例かもし

れません。

大学入試に関してもこれまで述べてきたことは同様です。入試に高得点をするためにも、文法を定着させることが大切です。

しかし、大学入試に文法が必要だとしても、文法用語を多用することに対する口実にはなりません。文法用語を生みの形で出題している大学入試問題は、私の知る限りありません。

しかも、ある文法ルールに限定して、それに関する知識を問うような問題は激減してきています。一昔前だと、too ~ to を so ~ that に書き換えさせる問題であるとか、分詞構文を使った文を他の表現を使って書き換えさせる問題などが出ていました。しかし、そのような問題はもう影を潜めています。

大学入試を文法知識詰め込みの口実にすることはできません。プライオリティーを決めて生徒の頭を整理してあげる。そして何より、英語を使わせてあげることが、本当の入試対策でもあります。

● むすび

これまで述べてきたように、文法指導において、文法ルールについてのレクチャーは、指導のごく一部でしかないことを認識することが大切です。そして、文法の定着をめざすのが文法指導の目的だということをよく理解することが何より重要です。

そして、文法定着のためには、生徒に英語を使わせることが不可欠です。使わせることを省いてしまえば、文法が生徒の頭の中に定着することはあり得ません。文法が定着していなければ、英語によるコミュニケーションも出来ませんし、大学入試で高得点をとることも不可能です。こうしたことを再認識して、指導に当たって頂きたいということを最後に強調しておきたいと思います。